

当館では「霞ヶ浦に育まれた人々の暮らし」を総合テーマに、春(5~6月)・夏(7~9月)・秋(10~12月)・冬(1~3月)と季節ごとに展示替えを行っております。本誌「霞(かすみ)」は、折々の資料の見どころを紹介するものです。展覧会や講座のお知らせ、市史編さん事業や博物館内で活動をしている研究会・同好会などの情報もお伝えします。

### 古写真・絵葉書にみる土浦(64)

#### 古写真「小学校応接室と青い目の人形」



#### 目次

|                               |   |
|-------------------------------|---|
| ○古写真・絵葉書にみる土浦(64) . . . . .   | 1 |
| ○博物館からのお知らせ . . . . .         | 1 |
| ○900年前の文字を写す(古代) . . . . .    | 2 |
| ○藩主が町にやって来る(近世) . . . . .     | 3 |
| ○彦直と墨僊(近世) . . . . .          | 4 |
| ○土浦藩領山根八ヶ村の灯心生産(近世) . . . . . | 5 |
| ○「答礼人形」絵葉書(近代) . . . . .      | 6 |
| ○市史編さんだより . . . . .           | 7 |
| ○霞短信 . . . . .                | 8 |
| ○コラム(64) . . . . .            | 8 |
| ○情報ライブラリー更新状況 . . . . .       | 8 |

昭和2(1927)年にまとめられた土浦尋常高等小学校(現土浦市立土浦小学校)の「学校経営要覧」のなかの一葉です。応接室内には電灯が点き、書額が飾られ、花籠が置かれた応接机が配置されています。ガラス戸前の木箱には、前年に国際親善のためアメリカから贈られた友情人形「青い目の人形」が飾られています。身に着けている襟にリボンのついた白い服は残っていませんが、人形本体と木箱が現存しています。

【情報ライブラリー検索キーワード「学校」】

## 博物館からのお知らせ

### ★★テーマ展「土浦花火百年」★★

10月11日(土)~11月24日(月)

土浦の近代史をひも解きながら、花火大会のあゆみを振り返ります。

### ★★特別公開「土屋家の刀剣―国宝・重要文化財の公開―」★★

10月25日(土)~11月16日(日)

土浦藩土屋家に伝わった刀剣のうち、国指定重要文化財を特別公開します。

### ★★期間中のイベント★★

#### ①つち浦々まちなか演劇めぐり 2025

演題1 つちうら商店街劇場短編演劇作品集  
とき 10月18日(土) 12:00~ / 16:00~  
10月19日(日) 13:15~ / 15:30~  
場所 博物館展示ホール

演題2 高校生企画「百年の花火」  
とき 10月18日(土) 11:15~ / 14:15~  
10月19日(日) 10:30~ / 14:45~  
場所 博物館視聴覚ホール

#### ②展示案内会

とき 11月1日(土) 14:00~

#### ③呈茶「お茶を一服いかがですかー花火によせた茶会」(定員50名・先着順)

呈茶 茨城県立土浦第二高等学校茶道部  
とき 11月3日(月) 13:00~  
場所 博物館展示ホール  
茶券 200円

#### ★無料開館のお知らせ★

- ・11月3日(月・文化の日)
- ・11月13日(木・県民の日)



博物館マスコット  
亀城かめくん

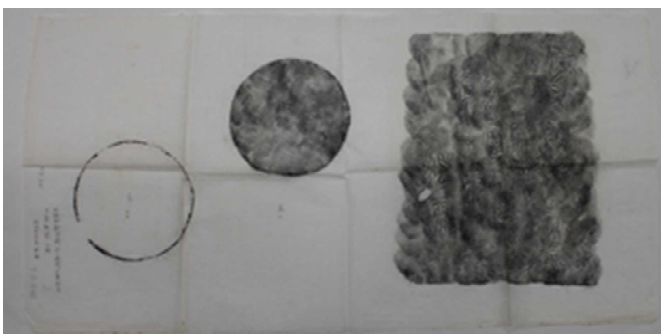
# 900 年前の文字を写す

## —東城寺経塚の経筒と拓本—

展示室だより『霞』の第 60 号・61 号では、市内東城寺の経塚から出土した経筒についてご紹介しました。東城寺経塚は明治 24（1891）年に発見され、同 35 年に考古学者の和田千吉（1871～1945）らによって国内初となる学術調査が行われた経塚として知られています。

明治 24 年に発見された経塚出土品のうち、その主だった資料は、当時の宮内省諸陵寮に所属した帝国博物館により買い上げられました。現在は東京国立博物館（東京都台東区）に引き継がれ、保管・展示されています。当館では、平成 19（2007）年度の展示リニューアルにあわせて、東京国立博物館所蔵の東城寺経塚出土資料のうち、保安 3（1122）年銘の経筒や華瓶・鏡などの複製品（レプリカ）を作成して、展示紹介してまいりました。同じく天治元（1124）年銘の経筒については、写真パネルにより紹介をしております。また、地元にとってはたいへん貴重な資料であることから、令和 2（2020）年度の特別展「東城寺と『山ノ荘』」で、東京国立博物館の全面協力のもとで実際の資料の里帰りも行いました。

そのような経筒に関係する資料が、昨年度当館の収蔵品に加わりました。保安 3 年銘・天治元年銘の 2 点の経筒の拓本です。拓本とは資料に紙を密着させ、墨を使って石碑や金属板に刻まれた文字や模様を写しとる技法のことです。現代のような写真技術の発展をみなかった時代において、拓本は文化財の記録方法のひとつとして用いられてきました。今日でも土器や瓦などの文様を写しとる方法として、考古学では一般的に行われています。墨の濃淡により表現する拓本では、対象となる資料の微妙な凹凸を強調することで、細部の特徴を際立たせて視認させることができます。とくに保安 3 年銘の経筒の銘文は、たいへん細い線で文字が刻まれています。この拓本では細やかな線が巧みに写し取られており、文字がとても視認しやすくなっています。文字が刻まれている経筒の表面は、丸みをおびているため、たとえば写真で記録する場合には、連続写真のように撮影をすることが必要になりますが、紙を資料にそわせることで広範に写し取ることが可能な拓本では、1 枚の紙の中に全ての文字列を収めることができます。さらにこの拓本では、経筒の底部や口縁部の拓影も添えられていました。



拓本は二次的な資料ではありますが、約 900 年前に刻まれた文字が鮮明に浮かびあがっている貴重な資料ではないかと思います。（萩谷良太）

経筒拓本（当館所蔵）



左のQRコードから解説動画のウェブページへアクセスできます。

下記の資料もあわせてご覧ください。  
いずれも古代コーナーに展示しています。

- 東城寺経塚出土資料（レプリカ）
- 東城寺経塚銅型経筒（写真パネル）





# 藩主が町にやって来る

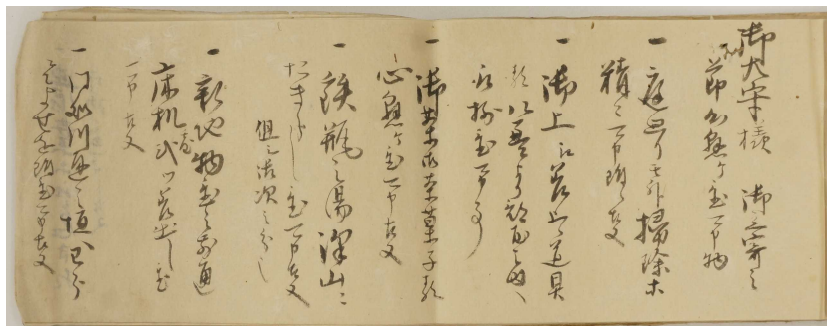
## —文化11年の国許帰国—

文化8（1811）年4月19日、水戸藩主徳川治保の三男であった治三郎（のち彦直）は、土浦藩主土屋家8代寛直の養子となることが認められ、23日には土屋家へ移りました。記録上、寛直は10月2日に亡くなり、忌明けとなった11月23日に彦直は土屋家の家督を継承しています。文化11年8月15日、彦直は幕府から初めて国許である土浦へ戻る暇を許されます。土屋家の歴代当主は、年に一度約2ヶ月間、国許の土浦へ戻る事が許されるのが慣例となっていました。

土屋家の家譜「御系譜」（当館所蔵）によれば、彦直一行は9月11日に江戸を出立すると、13日に土浦城へ入城したとあります。ここから、11月21日に江戸へ向けた帰路につくまでの約2ヶ月間、土浦に滞在しました。この間、彦直は何をしていたのでしょうか。残念ながら、初めて土浦へ帰国した文化11年の日記はありませんが、翌文化12年に記された彦直の日記「在城中岩間領谷原領巡見并参勤御礼迄之日記」（国文学研究資料館所蔵）が現存しています。これを覗くと、彦直は領内の各地へ見分に行ったり、寺社参詣を行ったりしていたことが確認できます。また、領内を見分する中で、彦直は村の名主宅に立ち寄り、休息をとっていたことも日記に記されています。そのため、文化11年も同様に過ごした可能性は高いと考えられます。

では、彦直を迎える側の人々はどのような対応をしていたのでしょうか。10月28日、中城町（市内中央）の商人である菅谷庄三郎は、藩士の古谷弓吉から、彦直が家に立ち寄るかもしれないという噂を聞きつけました。菅谷家は伊勢屋という屋号を用いて、醤油醸造や干鰯・酒などの販売、河岸問屋を営んでいました。また、土浦藩の年貢廻米や御用金貸付なども担っており、藩とは近い関係にありました。

彦直が立ち寄った場合に備えて、事前に注意事項が通達されています。菅谷家に伝来した「御大守様御入諸用留」（当館所蔵）には、その事項が書き留められています。ここには、「庭廻り其外掃除等精々可申附候事」（庭周りやそのほかの場所は掃除などをするようよくよく申し付ける）、「御茶・御茶菓子類心懸け置可申事」（お茶やお茶菓子などの準備も心がけておくよう申し付ける）、「鉄瓶之湯沢山二たき出し置可申事」（鉄瓶の湯はたくさん沸かしておくよう申し付ける）など、彦直をもてなすための準備を抜かりなく行うための命令が計7ヶ条記されています。



彦直にとって初めての領内巡見は、粗相が起こらないよう、藩士たちが根回しを行うことによって成り立っていたのです。（西口正隆）

御大守様御入諸用留（当館所蔵）



左のQRコードから解説動画のウェブページへアクセスできます。

下記の資料もあわせてご覧ください。  
いずれも近世コーナーに展示しています。

- 御系譜（当館所蔵）
- 鉄黒漆塗両引合二枚胴童具足（当館所蔵）





## 2025年度 秋季の展示資料解説③ 近世

# 彦直と墨僊

## —善行褒賞と世界地図がつないだ出会い—

文化11(1814)年、土浦藩主土屋彦直(1798~1847)が初めての国入りを果たしました。当時17歳。9月13日から11月21日まで土浦に滞在しています。領主にとって国入りは領地・領民を知る機会です。彦直が土浦滞在中に出会った領民のひとりが、城下で手習い塾を営む当時40歳の沼尻墨僊(1775~1856)です。襲封後はじめて土浦の地を踏む青年藩主と市井の教育者。身分も年齢も異なるふたりの出会いを紹介します。

ふたりが出会ったのは10月21日のことで、墨僊は母とともに、領内巡見に出かける途中の彦直に拝謁しています。この時、墨僊は母への孝行を理由に、母は長寿を理由に彦直から褒賞されています。墨僊は寛政10(1798)年にも父への孝行を理由に町奉行から褒賞されていますが、藩主からの褒賞はこれが初めてです。墨僊は彦直と拝謁した際の感激を漢詩に残しています。彼は褒賞を通じて君恩を実感したのです。

ふたりをつないだのは善行褒賞ではありません。土浦滞在中、彦直は墨僊が所蔵する「万国総界全図」を見て気に入り、写しの献上を命じています。この地図は「新鑄総界全図」と考えられます。江戸幕府天文方の高橋景保(1785~1829)が、世界地図作製の幕命を受けて文化6年に試作させた、銅板摺りの地図です。献上の経緯が記された史料によると、墨僊のもとを訪れた藩の重役日原小源太(1762~1834、年寄格御用取次)がこの地図を見て珍しがり、主君にも見せたいと申し出たことが彦直への披露のきっかけでした。彦直の命を受けた墨僊は早速地図の筆写に取りかかり、年内に完成させます。翌文化12年2月に献上が実現し、墨僊は褒美として掛軸などを拝領しました。

彦直と墨僊をつないだのは善行褒賞と世界地図でした。江戸時代、領主は慈悲深さの演出と社会秩序安定の手段として善行・長寿の領民を褒賞しました。これは多くの領民にとって領主と直に接することができる数少ない行事であり、墨僊はその機会を得たのです。日ごろの善行が彦直との出会いをもたらしたといえます。

また、墨僊は普段手習い塾の主人として町や村の子どもたちに読み書きを教えながら、地理や天文を研究していました。彼が所蔵する世界地図は青年藩主彦直の心を捉えました。彦直が地図の写しを所望すると、墨僊は書画の腕前を活かして地図を書き写し、これに応えたのです。多才な教育者墨僊の面目躍如です。(井上翼)



万国総界全図献上につき一札(個人所蔵)

参考文献 石塚眞『土浦藩の先生たち一文館を中心に』下(筑波書林、1987年)



左のQRコードから解説動画のウェブページへアクセスできます。

下記の資料もあわせてご覧ください。  
いずれも近世コーナーに展示しています。

- 墨僊居士遺稿(個人所蔵)
- 孝養推薦文(個人所蔵)





# 土浦藩領山根八ヶ村の灯心生産

## —「灯心等級印」の紹介—

現在の土浦市域は、江戸時代、当時の照明（あかり）に欠かせない灯心の生産地でした。灯心とは、火の燃料となる油を吸収できるように加工された藺草のことを指し、行灯などの油灯心や蠟燭の芯として使用されました。

宝永2（1705）年、幕府は藺草の生産地域を土浦藩領の村々であった「山根八ヶ村」（市内真鍋、上坂田、下坂田、大畑、藤沢、高岡、田土部、つくば市大形）などに限定しました。享保9（1724）年頃から、山根八ヶ村で生産された灯心は、江戸の「灯心問屋」（蠟燭屋仲間から派生）へ直接売り渡すことが定められました。そして、その体制は天保13（1842）年の株仲間解散令によって蠟燭屋仲間・灯心問屋が解散されるまで続きました。

今回紹介する「灯心等級印」は、株仲間解散令後の弘化2（1845）年の資料です。この資料は、土浦市指定文化財であるとともに、昨年度特別展「まなびのかたち」の開催にともない、博物館の寄託資料となりました。土浦藩の灯心専売計画の具体像がうかがえるとともに、土浦で生産される灯心を「商品」として売り出そうとしていたことを裏付けることができる貴重な資料です。では、具体的にみていきましょう。

「灯心等級印」の「等級」を辞書で引いてみると、「上下・優劣の順位を表す段階」という意味があります。つまり、「灯心等級印」は、灯心に品位をつけることで、その品質を保証して売り出すことができるものであったといえます。品質が保証された商品を購入したいという思いは、今も昔も変わらないのかもしれない。

さて、この仕組みを考えたのが、土浦藩の教員であった藤森弘庵（1799～1862）です。弘庵の策は、土浦藩領山根八ヶ村で生産した灯心の品位を4等級から12等級に変更し、相場を決めるとともに、売上に付加税を課すことでした。12等級を示すために十二支（子・丑・寅・卯…）が用いられています。また、別の資料をみると、土浦藩に「灯心掛」を置いて、灯心の品位や荷造を検査し、江戸へ出荷させる計画があったこともわかっています。この計画は実現しませんでした。が、「灯心等級印」は、灯心が土浦藩の財政を支え得る存在だったことを物語っているのではないのでしょうか。

（石原千尋）



灯心（品位）等級印並びに容器  
（個人所蔵、市指定文化財）

参考文献 『図説新治村史』、『土浦の文化財』、第46回特別展図録『まなびのかたち』ほか



左のQRコードから解説動画のウェブページへアクセスできます。

下記の資料もあわせてご覧ください。  
いずれも近世コーナーに展示しています。

- 差入申一札之事（灯心値段取極につき）（個人所蔵）
- 日記帳（個人所蔵）



# 「答礼人形」絵葉書

## —アメリカへ贈られた平和の使者—

昭和2（1927）年当時、アメリカでは移民問題が過熱し、日本人移民に対する排斥運動が起こっていました。この事態を憂慮した親日家の宣教師シドニー・ギューリック博士は、世界児童親善会を設立し、日本の子どもたちに人形を贈り、日本とアメリカの友好をはかる友情人形（青い目の人形）の配布計画を推進します。同年1月には、「青い目の人形」12,000体余りが横浜港に到着し、このうち243体（246体とも）の人形が茨城県へ配布されました。

その後、日本からもアメリカへ親善大使として返礼の人形を贈ることが計画されます。渋沢栄一が会長をつとめる「日本国際児童親善会」と文部省が中心となり、「答礼の日本人形」とし、各道府県、植民地、六大都市の代表として58体の特製の市松人形がアメリカへ贈られました。この人形を「答礼人形」と呼んでいます。

写真1は「茨城県代表贈答日米お人形記念絵葉書」と題された絵葉書袋に入った、「答礼人形」とそのお道具、茨城県へ贈られた「青い目の人形」の一部が被写体となった3枚1組の一枚です。「アメリカへ贈る茨城県代表お人形」が「茨城県 MISS IBARAKI」の銘板が付いた台座に立っています。

「答礼人形」は製作を一任された文部省が、東京百貨店協会に注文し、主要な人形（代表人形と六大都市）は京都の丸平大木人形店が、その他51体は東京の人形組合が請負いました。東京製の答礼人形の原型は、市松人形を得意とする二代目瀧澤光龍齋（1888～1966）が彫り、生地師が200体ほど生地をつくり、職人が胡粉を塗るなどし、特製の人形が仕上げられました。費用は全国の児童からの、一人一銭の募金（きょきん）がもとなりました。



写真1 写真絵葉書の「答礼人形」  
（当館所蔵）



写真2 里帰りした「答礼人形」  
『お帰りのなさい「筑波かすみ」』より

茨城県代表の「答礼人形」は、ウィスコンシン州ミルウォーキー市の博物館に、小道具や手紙・ビザ等とともに現存しています。平成18（2006）年には「筑波かすみ」として里帰りし、修復されました。写真2は修復後の姿ですが、出発前とは着物の柄が異なっています。「筑波かすみ」が現在の姿となるに至った経緯は不明ですが、他の「答礼人形」の事例では、アメリカ巡回の過程で、台座からの取り外しや着物の着脱、人形の入れ替わりがあったことが報告されています。当初の姿を変えながらも、平和の使者としての使命を全うした「筑波かすみ」は、私たちに平和の大切さを伝えてくれます。（野田礼子）



左のQRコードから解説動画のウェブページへアクセスできます。

下記の資料もあわせてご覧ください。

いずれも近代コーナーに展示しています。

- 青い目の人形（当館所蔵、筑波小学校旧蔵）
- 青い目の人形（土浦幼稚園所蔵）





# 市史編さんだより

## 東崎鷲神社の石碑—戦国時代に刻まれた板碑群—

市街地の一角にある鷲神社（東崎町）には、市指定史跡「鷲神社の石碑」として4基の板碑があります（写真1の②～④と別な場所に①）。これらは、市内で唯一の戦国時代（16世紀頃）の板碑群です。

板碑とは中世につくられた供養塔の一種で、そこには梵字である種子や銘文などを刻みます。関東地方西部を中心に、秩父の長瀬（埼玉県長瀬町）などで産出する緑泥片岩を用いて、上部を山形として二条線が刻まれる規格性の強い武蔵型板碑が広く流通しました。関東地方東部では、筑波山南麓の平沢（つくば市）などで産出する雲母片岩を用いた板碑が知られます。特に桜川の中・下流域を中心に不整形又は方形に粗く加工したものが見られ、常陸型板碑と呼ばれます。鎌倉時代（13世紀頃）につくられ始め、戦国時代には地藏信仰や庚申待などの民間信仰により多く造立されました。

「鷲神社の石碑」はいずれも常陸型板碑で、①は神社本殿の裏手にあり、②～④の3基は境内北側の築山に建てられています。①は「永禄七（1564）年」の紀年銘などが刻まれ、人々が経典を読み唱えた記念として建てられました。②～④は「南無地藏大菩薩」の銘文がある地藏信仰の板碑で、②は「元亀二（1571）年」、③は「天正二（1574）年」、④は「天正三年」の紀年銘を刻みます。それぞれ、この世での平穏な生活を祈る「現世安穩」と文字を刻みます。下部には、造立を先導した僧や信仰を共にする人々の名が刻まれます。

「鷲神社の石碑」に関わり、土浦の商家で国学者として知られる色川三中（1801～55）の雑記集である「野中廻清水」（茨城県指定文化財）に、「東崎鷲宮なる碑」（写真2）という記述があります。右頁上の欄外に「一」～「六」が付され、先に紹介した①～④の他に、「一」「弘治四（1558）年」、「五」「弘治三年」の紀年銘を持つ板碑もありました。左頁の「五」の図には、上部に種子として帝釈天の「㊦：イー」、北斗七星の「㊦：ロ」が書かれ、「南無帰命 頂礼帝釈天」「現世安穩」の銘文も記録されています。本来天上にいる天帝を祭る庚申待の本尊として帝釈天を礼拝し、身を慎み不眠で一夜を過ごす人々の集う姿が想像されます。

「一」「五」の板碑は、『土浦の石仏』（1985）の記述では所在不明とあります。三中の「東崎鷲宮なる碑」の記述などを参考に境内を探索すると、「一」「五」と思われる常陸型板碑が確認できました。「一」は地面からわずかに出た板石の幅が約70cmで、青味がかり緻密な石質であることも、三中の記述と符合します。また、「五」は欠損して埋没していますが、種子「㊦」と「現世安穩」の文字が確認できました。

これらの板碑群は、神社境内にまとまって残されてきたことが重要であり、戦国時代の桜川河口付近で行われた民間信仰の営みを具体的に物語ります。（関口満）



写真1 境内に残る板碑（①は神社本殿裏手にある。  
「一」は埋もれ、「五」は欠ける）

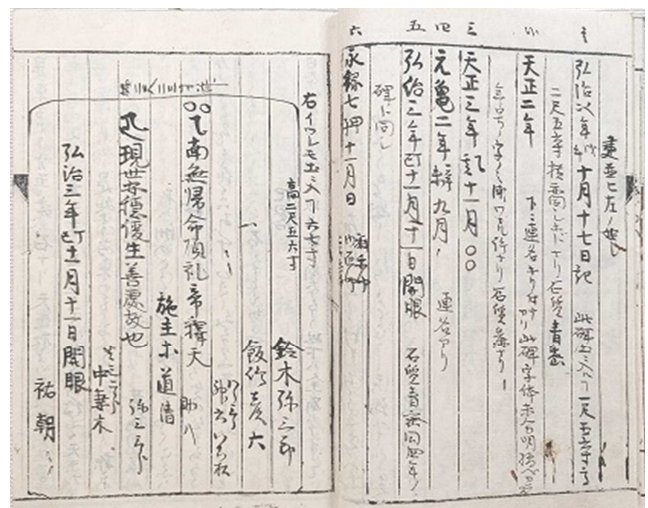


写真2 「野中廻清水」巻二（当館所蔵）  
「東崎鷲宮なる碑」の項

# 霞 短信

Kasumi-tansin

このコーナーでは、博物館活動にかかわる方々の声やサークル活動の記録などをお伝えしております。

本号では「戦争体験のお話をきく会」でご協力いただいた、茨城県立土浦第二高等学校の高野由梨先生にご寄稿いただきました。

## 地域の歴史を高校生に

土浦第二高等学校では、第2学年探究学習の一環として、土浦市立博物館と連携し、土浦の歴史を学ぶ活動を行っています。8月10日（日）には、夏休みファミリーミュージアム体験講座イベント「戦争体験のお話をきく会」に生徒5名が参加しました。生徒たちは、戦争体験者である栗栖恵子さんへの「聞き役」を担当し、東京大空襲や土浦への疎開、土浦高等女学校時代に勤労働員された経験などをお聞きしました。

会の前半は、東京の女子聖学院時代の教育勅語のエピソード、東京大空襲当日の体験などをうかがいました。空襲の際に家族が近くにいなかったため、1人で防空壕に入ったお話は生徒達に強い印象を与えました。土浦へ疎開後、土浦高等女学校に在籍した栗栖さんは、第一海軍航空廠へ勤労働員となりました。その時のご苦労をお聞きし、現在の高校生とは全く異なる生活を送っていたことが分かりました。亀城公園や亀城プラザなど、高校への通学路にあたる場所が多く登場したため、生徒たちも当時を身近に感じた様子でした。また、会の後半に栗栖さんがお話された「町が、地域が大事」「最も大切なことは、人と人との交わりである」との言葉に私自身も感銘を受けました。戦中・戦後を通じて、地域の人びとと助け合い、苦難を乗り越えてきたからこそ、重みのあるお話であると感じました。当日は、小学生から高齢の方まで61名の参加者が真剣に耳を傾けていました。このような貴重な機会を与えて下さった、土浦市立博物館の職員の皆さまに心より感謝申し上げます。

戦後80年を迎える中、戦争の記憶を次世代に語り継ぐことは、学校教育においても重要な課題です。土浦という身近な町を通して、生徒たちが戦争の歴史と向き合い、未来へ語り継ぐ姿勢を育むことができるよう、充実した活動を行っていきたいと考えています。

（茨城県立土浦第二高等学校 教諭 高野由梨）



## コラム (64) 博物館実習生の受入れについて

土浦市では、今年度も博物館実習生の受け入れを行いました。実習は、8月19日（火）から24日（日）までの6日間、当館と上高津貝塚ふるさと歴史の広場（以下、両館）で実施されました。8名の学生にご参加いただきましたが、元気な挨拶と積極的に取り組む姿勢が印象的な皆さんでした。今回は実習生受け入れの流れについてお話いたします。

実習の実施は8月ですが、受付は2月に行います。参加をご希望の方は、1月から2月にかけて博物館のホームページに掲載される案内をもとに、受付期間（約2週間）内に電話でお申し込みいただきます。

なお、お申し込みにはいくつかの条件があります。①実習参加年度に大学4年生以上、②両館への通学が可能、③人文系の専攻（主に歴史・考古・民俗）、④全日程参加可能などです。これらを満たしている方には、期日内に所定の申込書とレポートをご提出いただきます。その後、選考を経て、3月ごろに受け入れの可否をお伝えいたします。

一見、手続きだけで一苦労と思われるかもしれませんが、しかし、実習では博物館の舞台裏を見聞きし、実際に学芸員の仕事を体験できます。大学とは一味違った学びの機会となります。実習内容は館により様々です。実習先を決める際は事前の下調べをおすすめします。（井上翼）

## 情報ライブラリー更新状況

【2025・9・30現在の登録数】

古写真 606点（+0）

絵葉書 514点（+0）

※（ ）内は2025年7月1日時点との比較です。展示ホールの情報ライブラリーコーナーでは、画像資料・歴史情報を随時追加・更新しております。1ページで紹介した古写真・絵葉書もご覧いただけます。

霞（かすみ） 2025年度  
秋季展示室だより（通巻第64号）

編集・発行 土浦市立博物館  
茨城県土浦市中央1-15-18  
TEL 029-824-2928  
FAX 029-824-9423  
<http://www.city.tsuchiura.lg.jp/tsuchiurashiritsuhakubutsukan/index.html>  
1～6ページのタイトルバック（背景）は、博物館2階庭園展示です。

2025年度秋季展示は、2025年9月30日（火）～12月27日（土）となります。「霞」2025年度冬季展示室だより（通巻第65号）は2026年1月6日（火）発行予定です。次回の来館もお待ちしております。